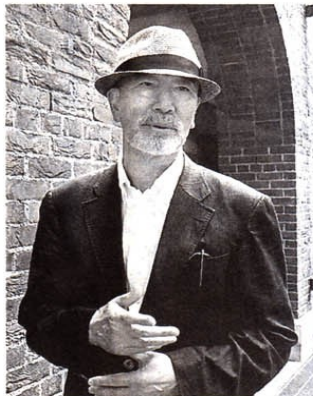




原発への怒り 朗読劇で



俳優中村敦夫(77)が作、演出、主演する一人芝居の朗読劇「線量計が鳴る」が19日、館ハーディーホールで上演される。福島第一原発事故を題材に、原発を巡る矛盾や怒りを浮き彫りにする。中村は「やりにがら死んでもかまわない。結果的にライフワークになると思う」と決意を話す。

「小回りのきく一人芝居なら、全国でできる。必要な道具くらい、自分が背負って歩けばいいんだから」と話す中村敦夫 (京都市上京区・同志社大)

中村敦夫が19日上演 全て奪われた元技師の半生

昔から環境問題に強い関心を持ち、原発にも反対していた。しかし、2011年の事故当時、「表現者として逃げられない」という思いを抱き

ながら、すぐには行動できなかった。「どこかで事故を予見しながら、自分が生きていくうちには起きないだろうとも思っていた。不覚だった」。

せりふは全て福島の方言で紡がれ、原発の専門用語も数多く登場する。「感情を描きだ。やがて実態を知るため、福島を訪れ、関係者に話を聞いた。専門的な資料を読み込み、ウクライナのチェルノブイリにも視察に向かった。「なぜこんな理屈に合わないことが起こったのか、だんだんと見えてきた」。

元技師の半生をモノローク(独白)で描き出す朗読劇に結実させた。当初、動員は厳しいと思っ

ていたが、多くの公演が大入り。男が口にする怒りに、会場からは「その通り!」と声が飛ぶことさえあった。「みんな関心がないんじゃないかと、知りたくても情報がなくて怒っていた」と手応えを得た。

京都公演は初演から教える19ステージ目となる。約2時間の長丁場、全国巡演は、高齢の中村には負担も大きい。「でも、生きていたら100回までやりますから」。午後6時半開演。2千円。アイト7075(881)5521。(長谷川真二)